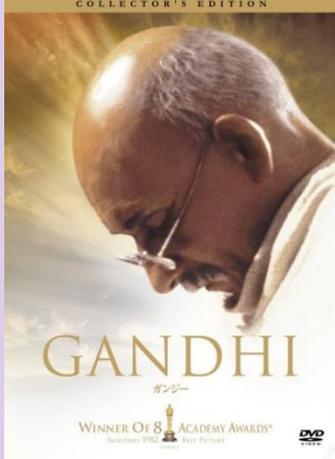


|                              |   |       |          |
|------------------------------|---|-------|----------|
| 『ガンジー』                       | 原題 <i>Gandhi</i>  | 1982年 | 執筆：清水 純子 |
| 制作国                          | イギリス、インド  |       |          |
| スタッフ&キャスト<br>(監督、脚本家、俳優、その他) | <p>スタッフ：監督・製作 リチャード・アッテンボロー/ 製作総指揮マイケル・スタンレー・エヴァンス/ 脚本ジョン・ブライリー/ 撮影ビリー・ウィリアムズ、ロニー・テイラー/ SFX デヴィッド・ハサウェイ/ 音楽ラヴィ・シャンカール/ 編曲ジョージ・フェントン/ 美術スチュアート・クレイグ/</p> <p>キャスト：ベン・キングズレー：マハトマ・ガンジー/ ロシャン・セス：ジャワハルラール・ネルー/ サイド・ジャフリー：パテル/ アリク・パダムゼ：ムハンマド・アリー・ジンナー / キャンディス・バーゲン：マーガレット・バーク＝ホワイト / エドワード・フォックス：ダイヤー将軍 (英語版) / ジョン・ギールグッド：アーウィン卿 / トレヴァー・ハワード：ブルームフィールド判事 / ジョン・ミルズ：総督/ マーティン・シーン：ヴィンス・ウォーカー / イアン・チャールソン：アンドリュウ牧師 (英語版) / ダニエル：デイ＝ルイス：コリン /</p>  |       |          |
| 画像                           |   |       |          |
| カラー・モノクロ                     | カラー   |       |          |
| 時間                           | 188分  |       |          |
| ストーリー                        | <p>1919年インド人の青年弁護士マハトマ・ガンジー (1869~1948) は、南アフリカの列車の白人専用的一等席に乗車したため、車外に放り出される。帰国したガンジーは、人種差別撤廃とインドの独立をめざして、非暴力不服従運動を指揮する。最大の悪は、貧困だと考えたガンジーは、イギリスによる搾取のために病弊したインドの産業を立て直そうと自ら農業に従事し、インド綿を紡いでイギリス綿を阻止し、インドによる塩の自給自足をめざし、大英帝国支配に抵抗する。同胞インド人の暴動を抑えるために、命がけの断食に何度も挑む。ガンジーは治安を乱した罪で幾度も投獄されるが、不屈の忍耐力で民衆の尊敬を得て「インドの父」と呼ばれる。1947年ついに英国はインドの独立を認めるが、ヒンズー教のインドと回教のパキスタンの争いが勃発し、再びガンジーは、断食によって抗議し、暴動を鎮める。1948年ガンジーは、デリーでの祈りの集会で、ヒンズー教右派の青年により銃で暗殺される。ガンジーの葬儀には国内外から多くの人々が弔いに集まり、その遺灰はガンジス川にまかれる。</p> |       |          |
| 時代設定                         | 1893年~1948年   |       |          |
| 場所                           | インド、南アフリカ   |       |          |
| 社会背景                         | <p>植民地インドでの相次ぐ暴動に手を焼いた大英帝国は、1919年イギリス領インド帝国において「ローラット法」(テロ活動の容疑者を無条件に逮捕、投獄、裁判を認めた法律)を成立させたため、インド各地で民族抵抗運動は激化した。大英帝国植民地下で差別と搾取に苦しむインドの住民たちの前に非暴力による独立を掲げた指導者マハトマ・ガンジーが現れる。イギリスは</p>  |       |          |

|                |  |
|----------------|--|
|                | 第二次世界大戦終了後、国力が衰えて経済的に苦しいため、ますますインド支配に固執する。インド住民のイギリスへの反感、民族意識と独立への芽生え。インドはイギリスの経済的搾取をやめさせるために、塩の行進（塩のインドによる自力生産を訴えた運動）、スワデシ運動（外国製品非買運動、特にイギリス産の衣服を買わず、インド木綿を着用する）などの非暴力不服従の抗議運動を展開する。  |
| 文化的背景          | インドはイギリスの植民地として支配下におかれ、莫大な経済的富の流出を余儀なくされたために、インドの住民は貧困と圧制に苦しめられていた。イギリスの人種差別政策にインド人の不満は頂点に達していた。その一方で、英語はインドの公用語として流布し、鉄道や近代的建築や設備などはイギリスから輸入されて、インドの近代化に貢献した。   |
| 使用言語           | イギリス英語、ヒンズー語。  |
| テーマ            | イギリスの植民地支配を非暴力によって勝ち取ったインドのマハトマ・ガンジーの偉大な功績、ガンジーが身をもって示した平和への道しるべ。  |
| みどころ           | 大英帝国の植民地支配の横暴さ、非暴力によって独立を勝ち得たガンジーの知恵と信念、同胞のために命をかけた偉人の生涯、人種差別撤廃と平和への祈り、ガンジーの人間としての悩みと魅力、ガンジー夫妻の夫婦愛、インドの自然と風物、インドのカルチャー（ヒンズー教の儀式と女性の服装やしきたり、象つかい）、インド（ヒンズー教）とパキスタン（回教）の宗教的対立による分裂。  |
| 印象深いせりふ        | GANDHI'S VOICE (weak, struggling, as he spoke the words to Mirabehn): . . . There have been tyrants and murderers – and for a time they can seem invincible. But in the end they always fall. Think of it – always . . . When you are in doubt that that is God's way, the way the world is meant to be . . . think of that. |
| 授業教材用<br>メリット  | インドの歴史、大英帝国支配の歴史がよくわかる。インドの風景、風習がよくわかるカルチャー・スタディーである。非暴力で独立を勝ち得たガンジーの稀有な偉大さがよく描かれている。植民地支配という国家規模の暴力、今日の民族紛争や宗教的対立について考えさせる。   |
| 授業教材用<br>デメリット | 上映時間が長い、インドの歴史や独立に対する問題意識と興味がないと最後まで鑑賞するのはたいへん。  |
| 映像入手元          | ソニー・ピクチャーズエンタテインメント  |
| 原作の有無          | 無  |
| 支持反応           | Rotten Tomatoes 評価（批評家 88、観客 92）   |
| キーワード          | インド、独立、大英帝国、南アフリカ、パキスタン、ヒンズー教、回教、キリスト教、ローラット法、塩の行進、イギリスの紡績工業、非暴力、不服従、断食、ガンジス川。   |

Copyright © Junko Shimizu All Rights Reserved.

★本サイトに掲載される情報の著作権は、清水純子に帰属します。

許可なく複製、改変、アップロード、掲示、送信、頒布、販売、出版等を禁止します。